

## 書評

芦谷信和・上田博・木村一信編

『作家のアジア体験—近代日本文学の陰画—』

赤澤 史朗

本書は、十人の筆者がそれぞれ一名のアジア諸国に旅した近代日本の作家を取り上げて、その作家たちの従軍記、旅行記、評論、文学などに示されたアジア観といったものを、紹介し検討したものである。本書ではそうした「作家のアジア体験」を紹介することに力点がかけられているらしく、各論稿の冒頭にはその作家が行った先の地図と旅程年譜が掲げられており、その末尾には論説中で引用された原文の一部が「関連作品原文」として添えられている。本書の筆者と論題だけを記せば、次の通り。

- ①木村一信「アジア・東南アジアとの関わり—序にかえて—」
- ②芦谷信和「国木田独歩の見た中国—『愛弟通信』—」
- ③友田悦生「夏目漱石と中国・朝鮮—「満韓ところどころ」の問題—」
- ④森崎光子「佐藤春夫と台湾、福建省の旅—『南方紀行』『霧社』の旅—」
- ⑤吉岡由紀彦「芥川龍之介の目に映じた中国—『支那遊記』・零れ落ちた体験—」
- ⑥瀧本和成「金子光晴とマレー・ジャワ・スマトラ—『マレー蘭印紀行』を中心に—」
- ⑦田口道昭「武田麟太郎とジャワ—『ジャワ更紗』—」
- ⑧木村一信「安部知二—インドネシアへの旅—ヒューマニズムと逸楽と—」
- ⑨上田 博「今日出海のフィリピン従軍—＜大東亜共栄圏＞の建設と崩壊—」
- ⑩富沢成實「武田泰淳と中国—『蝮のすえ』を中心に—」
- ⑪川島 晃「三島由紀夫とタイ・インド—『陶醉』としての世界の行方—」

全体としては紹介に力点がかけられているといっても、各筆者の書き方はさまざまである。その作家の「アジア体験」の受け止め方を、近代日本の知識人に共通する一つの型として論じようとするものもあれば（たとえば③）、むしろ逆にその作家の固有の美意識や境遇との関わりで文章の意味を探ろうとするものもある（たとえば④）。また従来の通説的評価に対する、アンチ・テーゼを強く押し出した論稿もある（たと

えば⑤)。しかしここでは、一つ一つの論稿に即して論ずるというより、幾つかの論稿に共通する特徴点や、たとえ共通していなくてもこの本全体の視角に関わるような論点を中心に検討してみたい。

まず本書では、「アジア体験」という形で一括してまとめているのであるが、対中国・朝鮮に対する関係と、東南アジアまたは南アジアに対する関係とでは、同じアジアといっても同一に論ずることはできないのではないかと、という点が気になる点である。中国や朝鮮とは、前近代以来の長い交流の歴史があり、同一の文明圏に属していた時代も長かった。しかし東南アジア・南アジア地域との関係は、けっしてそうではない。また近代にはいつてからは、中国や朝鮮は日本の侵略の対象となり、日本の植民地支配を受ける関係にあった。しかし東南アジア・南アジア地域は、近代には一貫して欧米列強の植民地支配下に置かれていたものであり、日本が軍事的にこの地を蹂躪したのは、近代日本の侵略戦争の最終段階であるアジア・太平洋戦争に突入してからの数年間であった。つまりこの二つの地域は、アジアといっても日本との関係が基本的に異なる地域なのであり、むしろこの二つの地域に対する「体験」を区別して考えた方が良いのではなかろうか。

このようなことを述べるのも、この点が本書全体の視角や構成に関わるからである。本書のいわば序論に当る木村①の論文で強調されているのは、一種の戦争責任論的視角である。そこでは近代日本が戦前戦後を問わず、アジア全体に対して一貫して侵略主義的な姿勢を保持していたという点が強調されている。日本とアジアの関係を考える上で、こうした戦争責任論的な視角は確かに大切な視角と言えよう。しかしあたり前のことだが、この観点だけで近代日本とアジアとの関係全体を説明しようとするのには、やはり無理があるのである。その無理をあえて押し通そうとすると、そこには歴史の現代的解釈が出現してしまう。木村①論文で引用された映画『女衞』での“からゆきさん”の科白（14頁）など、今日の貿易黒字減らしを迫られている「経済大国」日本と、「醜業婦」「娘子軍」の稼ぎでかろうじて外貨を獲得できていた明治・大正期の日本とをあたかも同一視し、日本と東南アジア諸地域との関係が、かつてと戦後とは全く異なっていることを無視している点で問題があるが、歴史の現代的解釈とは、たとえばこうしたものを言うのである。植民地支配をしていた「エゲレス」と、“からゆきさん”の輸出をしている日本とが、同等の地位にあったはずがないのである。

同じ“からゆきさん”で言うなら、こうした思い込みは作家の文章の解釈をも誤らせてしまう。瀧本⑥論文は、後に述べるように本書の中でも極めて印象深い論文なの

だが、この中で日本の「娘子軍」についての金子光晴の文章を引用して、「馬來人たち」が日本領事館を“からゆきさん”を使って経済侵略をもくろんでいる本拠だと見抜いているかのように述べているのは（128～129頁）、何とも変な点である。この引用された文章で言われていることは、「馬來人たち」が日本領事館を日本人売春婦の元締めだと誤解して、輕蔑しているということなのである。

歴史の現代解釈とは、過去と現在との間にある異質の契機を無視し、同種同質のもとして理解することを意味する。過去においてけっして日本と同一の関係にはなかったはずのアジアの二つの地域を、明確に区別しない構成になっているのは、この歴史の現代的解釈に傾いているためではないかというのが評者の疑問なのである。そこで、ともあれここでは、まずこの二つの地域に対する「体験」を分けて考えてみたい。

中国に対する作家たちの「体験」は、国木田独歩（②）、夏目漱石（③）、佐藤春夫（④）、芥川龍之介（⑤）、武田泰淳（⑩）、などを扱った諸論稿で取り上げられているが、これらの近代日本の作者たちの中国に対する姿勢は、大きく言えば次の二点から捕捉されていると言えよう。その第一はこれら作家たちが、伝統的な漢学や漢詩文の世界対しいかなる態度をとっていたかという点である。そして第二は、彼らが日本の帝国主義政策をどのように認識していたかという点である。戦後の日本の近代中国文学研究をリードした人たちは、戦中期の中国文学研究会のメンバーから輩出したが（本書で取り上げている竹内好も武田泰淳もその会員）、彼らにとってこの問題はハッキリしていた。つまり彼らにとっては、こうした日本の漢学・支那学の伝統を否定することが彼らの出発点だったのであり、それに基いて初めて、近代中国のナショナリズムを理解することが可能となり、さらに日本帝国主義への批判的視点を確保しえたのである。彼らに言わせれば、過去の中国文化に対する文人的な「支那趣味」なぞ、現実の中国の姿を誤解させる元だということになる。そしてこうした観点は、近代日本の作家の中国観を論ずる際の、今日に至るまでの通説的な視角となっているように思われる。たとえば芥川龍之介を論じた⑤吉岡論文で紹介されている諸説も、そして吉岡論文自体も、基本的には以上の視角に立つものである。

評者も、こうした通説的観点の有効性は認めたい。しかし同時に他方で、中国が侵略されていく過程で中国に対する蔑視感情の増幅されていく中で、この種の文人的な「支那趣味」が、時には中国や中国人に対する敬愛の根拠となることがあった点も評価したいのである。武田泰淳を除いて、本書で取り上げられている国木田独歩も、夏目漱石も、佐藤春夫も、芥川龍之介も、こうした漢学の伝統や文人的な「支那趣味」とは無縁ではなかった。そしてこうした「支那趣味」が、中国のナショナリズムへの

理解や日本の同化政策への批判とも結びつく場合があったことは、佐藤春夫を論じた④森崎論文が明らかにしていると思われる。この論文で見る限り、佐藤春夫には中国の内発的近代化への志向に対する期待があったと言えようが、彼の期待はその近代化を推進する中国の“文人”たちに対する高い評価に基づいていたのであった。そしてこうした側面を、佐藤春夫以外の作家たちの場合でも、もう少し見ることができたのではあるまいか。

これに関連して言えば、夏目漱石を論じた③友田論文は、漱石は日本帝国主義の支配する「日本人の共同体の内側」だけを旅していたに過ぎぬと指摘して（P. 57）、その指摘自体はたいへん説得的であるが、論稿の終りに近い部分で池田浩士の「福沢諭吉の『脱亜論』と漱石の文学的業績とか通底している」という説を肯定的に引用して、その説に立って結論を組み立てているのはいかがなものであろうか。評者の思うには、池田浩士の「通底」論は極めて荒っぽい議論に過ぎないのであって、確かに福沢諭吉も漱石も、日本の近代文明化を推進する立場に立っていた点では共通している。福沢諭吉の大きな特徴は漢籍といったものの価値を全否定しているところにある。この漢学・漢籍の否定が脱亜論を支えているのであって、だからこそ福沢は「東洋の悪友を謝絶」しようと考えたのである。これに対し「抜群の漢籍の素養」（P. 60）をもち、そこに大きな意味や価値を認めていた漱石は、その意味ではけっして脱亜論の立場に立っていないのである。またここでは、中国人・朝鮮人に対する漱石の蔑視意識が指摘されているが、この点については漱石がかの地で中国人・朝鮮人の文人や知識人に会っていないことも勘案しなければなるまい。つまりこの種の蔑視意識は民族蔑視意識でもあるが、同時に中国の士大夫・文人が中国の民衆に対して抱いているかもしれない、階級的蔑視意識と共通するものとも取れるからである。つまりこうした蔑視意識は、必ずしも脱亜論的志向と結びつくものとはばかりは言えない。いやむしろ逆に、漱石の中にあるやや古めかしい漢学的素養の中に、脱亜論的方向とは異質の契機がはらまれていることを、もしかして見出していけるのではなかろうか。それは日本の近代の中に残された、「前近代」の可能性と言ってもよい。

もちろん日本の近代過程を主導した発想は、本書でも指摘している脱亜論的思考であった。しかしこの脱亜論というのも厄介なものなのであって、それを示すのが⑨上田論文で登場してくるアイイ女史の例である。フィリピンの知識人であるアイイ女史は、もともとアメリカ的教養のもち主であったが、彼女は途中から対日協力を放棄してアメリカ人とともに戦う抗日ゲリラに加わってしまう。フィリピンではアメリカ的価値観の肯定とフィリピン人としてのナショナリズムが一致するという局面が見ら

れたのであり、これを否定する日本への反発が生じていたのである。ここにはむしろ、フィリピン固有の問題が潜んでいることも間違いない。しかし同時に、そこにはアジア諸民族に共通する脱亜的志向ともいえるべきものが見てとれるのである。木村①論文に引用された、竹内好の「脱亜」と「興亜」という言い方を借りるなら、日本人だから脱亜論、アジア諸民族だから興亜論と考えるのは誤りで、侵略した日本にも、侵略されたアジア諸民族の側にも、「脱亜」と「興亜」の両契機がはさまれていると考えられるのである。伝統的アジア的世界からの切斷を熱望する動きも、アジア諸民族の中には共通して流れているのである。なぜなら近代化過程はアジア諸民族にとって、「脱亜」にはかならずぬ面があったからである。つまり一面では日本の知識人と、他のアジアの知識人と共通する近代化志向の一つとして、脱亜論を位置づけることも、また可能なものではなかろうか。

さて次に、東南アジア地域に対する作家たちの「体験」として、本書では金子光晴(⑥)、武田麟太郎(⑦)、阿部知二(⑧)、今日出海(⑨)の「体験」が扱われている。三島由紀夫(⑪)の場合、タイは東南アジアに属するが、肝腎のインドは東南アジアとは言えないし、また日本とインドとの歴史関係はちょっと独特であって他のアジア諸国と一括しえない面が多いので、ここからは除外したい。さて、取り上げられた四人の作家のうち、最初の子金子光晴を扱った⑥瀧本論文は、対象地域も②～⑤で取り上げられた中国から東南アジアへ飛んだというだけでなく、対象に接近する視角も決定的に変化している点で、たいへん新鮮な印象を受けた。そこに展開されているのは多人種・多言語の底辺世界であり、圧倒するような密林の自然の力に圍繞されて生きる生の姿である。こういう地点に、人間存在の一般的なあり方を見出していくのが金子光晴の視角なのであるが、こうした視角が抜群に新しく感ぜられるのである。だが⑥～⑨の論稿を見てみると、こういった視点で東南アジアを「体験」した金子の方が、むしろ例外的な存在なのに気づく。金子光晴を除く他の三人は、皆アジア・太平洋戦争期に軍によって派遣された、いわゆる南方徴用作家なのである。そしてこれは文学者に限らないのであって、ほとんどの日本人はアジア・太平洋戦争期になって初めて、東南アジアに直面したのであった。むしろそれ以前から、日本人企業家の進出などがなかったわけではない。しかし東南アジア地域は、当時欧米列強の支配下にあったのであって、日本人の企業活動にも制約がとれない、量的にも質的にも東南アジアに対する明確な知識やイメージが広く日本人の間で貯えられることはなかったと言えよう。今日古書店で見かける東南アジア関係の本の多くも、アジア・太平洋戦争期に出版されたものであって、それ以前のものは極めて少ない。

動員された南方徴用作家たちも、命令で行かされた東南アジア地域の生活と文化について、もともと格別の関心や知識があったわけではない。現実には南方に行かされて初めて、それらに直面したわけである。しかもその直面の仕方は、南方徴用作家という身分を離れては難しかったのであって、つまり基本的には日本軍政の枠内で、一面でその軍政支配に自分自身も乗っかりつつ、他面でその軍政の矛盾を見つめるという種類のものではあったと言える。武田麟太郎の場合はもとより、阿部知二も今日出海も、日本軍政の実態に対する批判的意識を抱いていたことは、⑦～⑨の論稿から読みとれる。しかし同時にやはり武田麟太郎に限らず、阿部知二も今日出海も、もし日本の軍政を批判しようとする、その批判の根拠に何らかの形で大東亜共栄圏の理念のようなものをもって来ざるをえない面があったのではあるまいか。たとえば、こうした乱暴な軍政支配は、アジア民族解放という大東亜共栄圏建設の理念に反するものだ、という形での批判である。それは時代状況の問題であって、けっして個人の問題ではないのである。この弱点への言及が、やや⑨上田論文では弱いような印象を受けた。

以上、中国と東南アジア地域とに分けて、作家たちの「体験」を考える視点について述べてきたが、本書の中ではもう一つ重要な視点が提示されていると思われる。それは、苛酷な状況の中に生きる民衆像ともいうべきものである。それは④の佐藤春夫、⑥の金子光晴、⑩の武田泰淳を扱った論稿の中に特にくっきりと描き出されていると言えよう。苛酷な状況といっても、佐藤春夫と金子光晴の見たのは植民地支配下に生きる民衆であり、武田泰淳の見たのは戦乱の中に生きる民衆であった。しかしこの植民地支配と貧困、戦乱の中に生きるという状態は、戦前のみならず戦後においてさえ見られる、アジアの普遍的現実そのものであったとも言える。日本の侵略や軍政も、そうした状況の一環としてあった。こうした苦難の中に生きる民衆の発見は、アジアの民衆へ接近していく手がかりを与えるものである。ここまでアジア諸民族とも共通する視点の問題として、漢学的教養や脱亜論やその他について論じてきたつもりだが、その中で苛酷な現実の中で生きるアジアの民衆の発見という点は、その何にも増して重要な、近代日本の作家たちが獲得してきた視角であったと思われる。

本書が示しているように、近代日本の作家たちの「アジア体験」は、しばしば国家に保護された旅行によるもので、作家という“自由人”の体験とばかりは一概に言えぬ性質のものであった。しかしなおそこには、自由な感性の働きや既成の枠組みにとらわれない眼があったことも事実なのであって、今日の私たちが学ぶべき多様な伝統を掘り起こしていった点に、本書の提起の最大の価値があると言えよう。

(1992年7月刊 世界思想社)